

無量寿

【発行】雲夢山壽命寺

2018
秋

CONTENTS

[P2-3] 報恩講講師法話「南無阿弥陀仏を聞く」
[P3-6] 永代経法話録「第十八願のころ」

大津市雄琴 3-19-36 TEL/FAX 077-572-5125 <http://jumyouji.net/>

親鸞聖人報恩講

10/27(土) 14:00～, 19:00～

10/28(日) 7:00～, 10:00～, 13:30～



【講師】浅野執持 (あさの しゅうじ) 師

(本願寺派布教使/広島仏教学院講師/今治市万福寺副住職)

今回のご講師は瀬戸内海の大三島からお迎えします。1971年生まれの47歳です。2012年には『絵ものがたり 正信偈 ひかりになった、王子さま』という絵本を企画・出版されました。正信偈を平易な語り言葉に訳し、そこに美しいイラストを添えた絵本です。絵本の世界観そのままに、易しいながらも宗教的奥行きを湛えたお話が聴けることでしょう。

報恩講は真宗門徒とつて宗祖・親鸞聖人のご遺徳を偲ぶ一年で最も大切な法要です。遺徳とは「後世にのこる恩徳」と辞書にあります。つまり報恩講は親鸞聖人の恩徳に報いるべく勤める法要ということですが、でも親鸞聖人は鎌倉時代の方です。自分の直接のご先祖様ならいざ知らず、そんな昔の人の恩徳なんて、よく分からないと言う方もいるでしょう。

ところでこの「報恩講」という名前は、親鸞聖人のひ孫で本願寺第三代の覚如上人が、聖人の三十三回忌にそのお徳を讃えて著した「報恩講私記」に由来しますが、覚如上人はこの制作の際、親鸞聖人の恩師・法然聖人を讃えた「知恩講私記」という書物を参考にされたそうです。

知恩と報恩。『宝積経(ほうしゃくきょう)』という経典には「知恩報恩の者、人中の珍宝となす」「知恩報恩は、これ菩薩行」と、これらが一連の言葉として出てきます。恩に報いるにはまず恩を知らねばならない。当たり前のようですが、これを珍宝、菩薩行と讃えるのはつまり、日々無数の恩を受けながらそうとも知らず、従つてそれに報いることもなく平気な顔をして生きていくのが私達の姿だということを示しているのでしょう。

そういえば数年前の報恩講で講師の日下賢裕師が「報の字には『知らせる』という意味もある」とお話くださいました。この意味から言えば、報恩講とは親鸞聖人の恩徳を知らされる法要でもあるということなのです。

聖人の恩徳とは偏に南無阿弥陀仏のみ教えを私たちに示し勧めてくださったことに尽きますから、結局のところ報恩講とは、南無阿弥陀仏とは何なのか、それが私の毎日にどう関係するのか、そのはたらきを改めて聞かせていただく法要ということになりましょう。

親鸞聖人の恩なんて知らない。南無阿弥陀仏なんて私の生活に関係ない。そう思っておられる方にこそ、お参りいただきたい法要です。たくさんのご参拝、心よりお待ちしております。

「南無阿弥陀仏を聞く」

浅野執持師



この度の報恩講の講師のご法話です。一面で触れた「恩を知る」、「南無阿弥陀仏が私の毎日にどう関係するのか」といったことも繋がる内容です。当日どのようなお話をしてくださるか、これを読んで楽しみに待ちましょう。



昨年十二月九、十日、若い世代を対象とした集会「本願寺ギャザリング」が本山で行われました。その中で、元サッカー選手の中田英寿さんと、僧侶で信教校講師の天岸浄圓先生の対談があり、私も会場となった阿弥陀堂で聴講させていただきました。

日本の伝統文化を見つめ直す活動が続いている中田さんは、今、「知る」ことが楽しいとおっしゃいます。一杯の米でも、器一つであっても、現地におもむき、育てた人、作った人から直接話を聞く

(ちようもん)と大切に言い習わしてきました。親鸞聖人は「阿弥陀如来の願いが、苦しみの連鎖から逃れられないこの私を目当てとしてたてられ、その救いはたらきが南無阿弥陀仏として既に完成し、今、私に届けられている。そのことを疑いをまじえず聞く」とお教えくださいます。ですから、お聴聞を特に「南無阿弥陀仏のいわれを聞く」、「仏のみ名を聞きひらく」とも言うのです。

親鸞聖人があらわされた「正信偈」には、「南無阿弥陀仏のいわれ」が漢詩の形で示されています。私はこの「正信偈」の意味を、日頃お聴聞の縁のない方々にも親しんでもらいたいとの思いから、「絵ものがたり」という形で現代語訳しました。ある仏教婦人会の研修会で、その絵本の朗読をさせていただいた時のことです。会の後で、お一人のご住職から、「とても工夫されていてわかりやすかったです。ただ『聞きひらく』という言葉がありました。が、一般の方には少し難しいように思います」と、ご指摘をいただきました。



考えてみると、南無阿弥陀仏のいわれを聞く、仏のみ名を聞きひらくとは、聴聞を大事にする浄土真宗特有の表現であって、その縁の薄い方にはあまり馴染みのない言葉です。「聞きひらく」を辞書で調べると、「聞いてその意味を知るとあります。しかし、「み名を聞きひらく」とは、南無阿弥陀仏の意味を知ることにとどまりません。南無阿弥陀仏は、仏さまの名であると同時に、仏さまの「無限のはたらき」そのものであるからです。著名な作家で茶道家でもあった重森三玲さんが、次のような言葉を残しています。

「茶室は美の殿堂であり、その中でなぜ茶を飲むかといえば、美を全部溶かして飲むということが茶であり、少し大きな言い方をすれば、宇宙を飲んでいくわけなので、それがわからないのなら飲む必要はないのです」

茶の心を端的にあらわす厳しい言葉ですが、念仏の世界につながるものをここに感じます。



親鸞聖人

は、法然聖人から念仏による救いをいただく

かれました。それは南無阿彌陀仏と称る私の行為による

救いではありません。ひと声の

念仏の中に、阿彌陀如来の無限の

はたらき、そこに積み上げられた

はてしない歴史の因果を聞くので

す。そして、それは知識

として聞くのではなく、

日々の歩みを通して、人生のすべてを通

して聞く、詰まるところ人生そのものが

南無阿彌陀仏の内にあると聞くものな

のです。

昨年十二月九日、組内のご住職がご逝

去されたという知らせを受けました。気

さくで飾らない、私たち若輩僧侶にも優

しく接してください、本当にあたたかみ

のあるご住職でした。葬儀の際、総代長

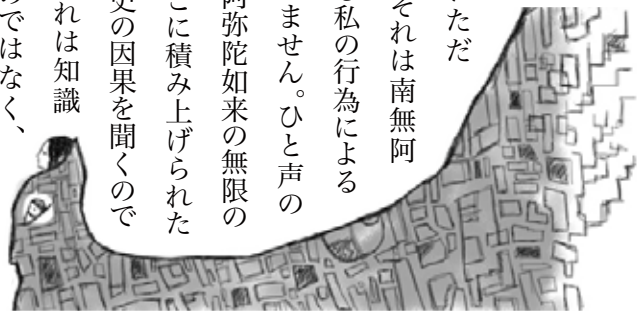
の挨拶が次のようにありました。

「住職は十月から治療のため入院され

ていましたが、報恩講には一時退院して、

私たちの前でお話しくださいました。そ

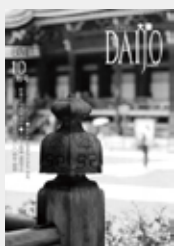
れが最後のご教化(きょうけ)でした。そ



の言葉をここで取り次がせていただきました。『なんまんだぶつで、このお寺に養子にまいました。なんまんだぶつで二人の娘に恵まれました。なんまんだぶつで素晴らしい養子を迎えました。なんまんだぶつで孫に恵まれました。もう時間がありません。時間がありません。なんまんだぶつ、なんまんだぶつ』

ご住職のこの言葉は、「どうか、今、南無阿彌陀仏にであってください。今、ここで、南無阿彌陀仏を聞いてください。時間はないです。時間はないのです」との、私たちへの切なる願いに聞こえました。南無阿彌陀仏のいわれを聞く。仏のみ名を聞きひらく。無限のつながりの末にであえた阿彌陀如来とのご縁です。南無阿彌陀仏を聞かせていただきましょう。

★『大乘』購読のすすめ★



本願寺の月刊誌『大乘』では毎号右のような易しい法話や、「正信偈」「歎異抄」等についての入門的解説などが読めます。寿命寺門徒の皆様にもオススメです。

お求めは下記迄。定期購読もできます。

【本願寺出版社】

0120-464-583 (フリーダイヤル)

<https://hongwanji-shuppan.com/>

平成三十年永代経法話録

「第十八願のこころ」

浄土真宗の生活信条・第一条に聞く

九條孝義 師(湖南省報恩寺)

五月十三日、昼・夜二座勤められた永代経法要。

その夜座のご法話の要約をお届けします。浄土真宗という宗教の根本の根本である阿彌陀如来の第十八願(＝本願)について、真正面から、しかし難解になることなく、説き開いていただきました。



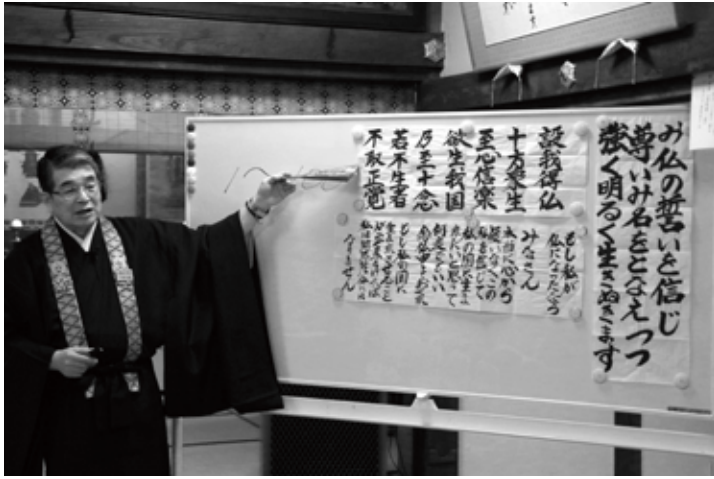
「生活信条」第一条と阿彌陀さまの本願

こんばんは。ようこそのお参りです。今席は「浄土真宗の生活信条」の第一条を通してお御法を頂戴したいと思えます。「み仏の誓いを信じ、尊いみ名をととなえつつ、強く明るく生き抜きます」。最初の「み仏の誓い」とは阿彌陀さまのご本願のことです。本願でなんや？というところ、今日お昼の法要で『仏説無量寿経』をお勤めされましたね。その中に阿彌陀さまがかつて法蔵(ほうざう)菩薩であった時に建てられた四十八の誓願が出てきます。お持ちの経本を開いてみてください。「設我得佛(もし私が仏になったら)・・・」

というのが繰り返して出てくるでしょ？それが四十八願です。そしてその中でも第十八番目の誓願こそが、一番大切な内容ということで、これを親鸞聖人は「本願」と頂戴されました。ここに私達生きとし生けるものを必ず救うと誓われていると仰るんです。

せつかくですから皆さんで読んでみませんか。「設我得佛 十方衆生 至心信樂 欲生我国 乃至十念 若不生者 不取正覺 ・・・」。分かった？漢字だけではなかなか分らんなあ。これについて、大阪の梯(かはし)先生という方がこんな風に訳してくださっています。

「もし私が仏になつたなら(設我得
仏)、みなさん (十方衆生)、本当に心か
ら(至心)、疑いなくこの私を信じて(信
楽)、私の国に生まれたいと思つて(欲生
我國)何度でもいい、念仏申しておくれ
(乃至十念)。もし私の国(浄土)生まれ
させることができなければ(若不生者)、
私は阿弥陀仏にはなりません(不取正
覺)」。どうやるか?これで意味は分かっ
てもらえたと思います。



「子ども」が生まれたから「親」になる

でも必ず救うという誓願なら「念仏し

てくれたら必ず私の国に生まれさせる」
とはつきり言ってくれたらええと思うん
ですが、そうはなつてない。若不生者不取
正覺。ここが若い頃よう分らんかった。

だから父親に聞きま

した。そしたら「お前

が生まれんかった

ら、わしは親になつて

なかつたし、逆にわしが親に

なつたという事は、お前が生まれたと

いうことや」と言われました。

分かりますか?私をお浄土に生まれ

させることができなかつたら、阿弥陀さ

まは阿弥陀さまになれないんです。それ

が阿弥陀さまになつてくださったという

ことは、私が必ず浄土に生まれていくと

いうことなんです。ご和讃に「弥陀成仏

のこの方は 今に十劫を経たまへり」と

ある。私が生まれる遙か昔に阿弥陀さま

になつてくださつてる。だからこの私も

必ず救われていく。親鸞聖人はそう頂か

れたんです。



唯除五逆誹謗正法

ところがです。第十八願以外は全部・

・不取正覺」で終わつてるのに、第十八

願だけまだ続いて何か書いてある。「唯除
五逆誹謗正法」。五逆の罪を犯した者
と、正法、つまり仏法を謗つたものは救
いの対象から除くぞ、ということですよ。五
逆とは、父を殺す、母を殺す、仏になろう
と努力している人を殺す、お釈迦様や菩
薩さまを傷つけて血を流す、教団の和合
を破る。これらの罪のことを言います。

私は六十歳まで教師をやつてました、

当時はこれを見ても「自分は大丈夫」と

思つてました。父母を殺すとか、そんな極

悪なことしてないもん。だから大丈夫、

私は阿弥陀さまの救いに入つてると安

心してました。それが定年後、布教使に

なる為に本山で勉強を始めた時に出

会つた親鸞聖人八十歳の頃のお手紙に、

その安心が根底から覆されました。

お手紙は京都から関東の門弟に宛て

たものでした。当時関東では聖人が離れ

てから聖人の教えと違つたことを流布す

る者が出てきて混乱してました。それ

に怒つて筆を執られた内容でしたが、そ

こに「師を謗り、親を謗るのは五逆に等

しい」と書かれていたんです。

みなさんどうですか?先生や親を

謗つたことはない?身に覚えのない人は

涼しい顔をしてたらしい。でも一遍でも覚
えがある人は五逆罪と一緒やと親鸞聖
人が仰つてるんです。私はこれを見て「え
らいこつちやー」となりました。身に覚え
があつたんですわ。

「ほんまに厄介やわ」

私の父は明治四十二年生まれで平成

二十五年、満百四歳で亡くなりました、

長いこといてくれはつた。長生きの秘訣

を聞いたら「何でも食え、酒も飲め」。そ

の言葉通り、百三歳まで毎晩二合飲んで

はりました。

百三の誕生日、ご

門徒さんからお

祝いにたくさんお酒

をもらいました。それを見て私は「今日か

らは三合飲みなはれ」と冷やかしまし

た。そしたら「いや、蓮如上人の仰せに

従つて今日からは一合にしとく」と言う。

なんのこつちやと聞くと「領解文に『この

うえはさだめおかせらるる御おんおき

て、一期(いちご)をかぎり、まもりもうす

べくそうろう』とお示しやろ」と返して

きた。「いや、あの一期は一生という意味や

から、ずつと飲みなはれ!」とけしかけた



ら、「いや、やつぱり一合にしとく」。なんでやと更に聞くと、ボソッと「まだいたい」。百三になつても尚、まだ娑婆を去りたくない、そういう父でした。

それでも最期は、おむつをしてもらうことになりました。夜は十一時に替えます。「おじいさん」と呼びかけると、「眠たいのお」と言いながらベットから降りて自分で汚れたパットを取ります。私がそれを片付けて新しいのを渡すと、また自分でそれをはめる。それで終わり。部屋を閉める時に私が「今生の別れやで」と言う

と「長いこと厄介やったなあ。おおきに、おおきに」と返事してくる。その時口には出さんけど、心のうちに「ほんまに厄介やわ」と思っている自分がいました。

朝は六時に替えます。「おじいさん」と起こしに行くとも毛布から顔を出して「おう、まだ生きてる」。夜と同じ要領でおむつを替え終わると「おい！おい！おい！」と三ヶ所指を差します。ポットの水を替える、食器を片付けろ、簡易トイレを始末せい、という事です。毎朝のことですから、こっちは「言われ



んでも分かつとるわい！」となります。口には出しませんが腹の中では煮えくり返つてました。片付け終わつたらベットで毛布をかぶりながら「おおきにおおきに。厄介やったなあ」と礼を言ってくれるんですが、その言い方にまた腹が立つ。姿は確かにに世話してる。でも腹の中では父親を誇っている自分がいたんです。

「おばあさん、もつ、ええんとちやうか」

母は九十三まで生きてくれました。でも亡くなる前に認知症で寝たきりになりました。結局六ヶ月ほど家で介護させてもらつたんですが、最初の三ヶ月は妻が一人でお世話してくれました。女性のことなので私は遠慮していません。でも三ヶ月ほどした時、妻に「出番やで」と言われしました。母の腰がもう動かんようになって妻一人ではおむつを替えられなくなつたので、腰を持ち上げてほしいと言

うんです。初めてお手伝いさせてもらう時、ベツトに寝る母の背中から腰の下に手を入れてびっくりしました。考えてみたらそれまでもう長いこと母の身体に触るということはなかった。だから随分前の感覚

で母の背中は丸くて柔らかいものやと思つてたんです。ところが今、寝巻き越しに腕に伝わってくるのはゴツゴツとした骨の感覚でした。「おばあさん、こんなに瘦せたんか！おおきに、すまんかったなあ、苦劳かけたなあ」。その時は心の底からお礼を言つたんです。

でもそれが何日続いたやろか。その後三ヶ月、毎日母の背中に手を突っ込みながら「おばあさん、もう、ええんちやうか」と思っていました。心で母を殺してたんです。誇るどころか、殺してたんです。

私は救いから除かれるのか？

親鸞聖人のお書物を読んで、この時の気持ちに蘇ってきました。なんとこのことや。私はどつぷり五逆の中に入つてるんか？居ても立つても居られなくなつて本山の先生に相談しました。「ああ、そのことにお気づきになりましたか。そしてたらもうちよつとご本を読み進めましょう」と『尊号真像銘文』という親鸞聖人八十五歳のときのお書物を勧められました。貪るように一生懸命読みました。するとそこにこう書かれているのに

出会いました。

「唯除五逆誹謗 正法といふは、唯除といふはただ除くといふことばなり。五逆のつみびとをきらひ誹謗のおもきとををしらせんとなり。このふたつの罪のおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべしとせんとせしなり。」



つまり五逆の罪は重たいぞ。仏法を誇ることも重たい罪やぞ。そのことをこの私に注意するために「除く」と言われているんやと親鸞聖人がお示しくださっているんです。でも、そうは言つても誇る前がいるやろ。悪いと分かつてても誇るしまうのがお前やろ。阿弥陀さまはそんなこと、とつくと見越して、先に十方衆生、みんな漏れずに必ず救うとお誓いくださいったんやぞ。親鸞聖人がそう頂いてくださっている一文がこれでした。

これに出会つて、ああ良かったと思ひました。心で親を誇り殺した私やけど、そうする私を先に見越して、必ず救うと仰つてくださっていた。そんなお前こそがわしの救いの目当てやぞと仰つてくださった。さつている阿弥陀さまやつたと知らせて

もらって、心底安心したんです。

私と同じように親を誇った心覚えのある人も、顔を上げてください。いや、あかんことなんやで。でもな、誇らずにはおけなかつた、そのお前が放つとけんと仰る阿弥陀さまがいてくださるんや。ありがたいことやないですか。



「お浄土があつて良かったなあ！」

母が往生する二月前に言いました。

「お浄土に還らせてもらつたらな、お父さんお母さんに会つて、よう頑張つてきたなと頭を撫でてもらいたいわ」と。九十三の婆さんが父母に頭撫でて褒めてもらいたいと、そう言いました。

程なくして葬儀になりました。涙を流す間もないうちに慌ただしく日が過ぎて行きましたが、五七日が終わつたころ、庫裏の御内仏でお勤めをしていたら、ふつと、母と向き合っている気持ちになりました。そして思わず「おばあさん、おばあさん、お浄土があつて良かったなあ！」と声に出して語りかけました。

三つの時に両親と死に別れ、あちこち

に育てられた母。尋常小学校四年までしか行つておらず、片仮名しか書けなかつた母。それがなんとか父と出会い、私を生み育ててくれた。その母が今、お浄土で九十年ぶりに父母に出会い、よう頑張つたな、よう頑張つたなと頭をなでてもらっていると思えたら、嬉しくて嬉しくて、初めて涙をポロポロと流すことができました。そして「おばあさん、待つていただきます。そのうち私もそちらへ寄せてもらて、その後の報告をさせてもらいますからね」と言いました。

生きてよし、死んでよし

阿弥陀さまは「心配するな。お前を浄土に生まれさせられなければ、わしが仏になれん。わしが仏になるには、お前をなんとしても浄土に生まれさせなあかんのや」と仰つてくださっている。その誓いを聞かせて頂いたら、阿弥陀さまのご本願とそれを達成するためのご苦勞はなんと、このぼんやり者の私一人のためのものやつたと知らされます。そして「そうですか、ありがとうございます」とお任せさせていただくよりない。その時に必ず浄土に生まれることができる約束を頂

きます。その安心が、「み仏の誓いを信じ」た姿であり、それがご信心を頂いたということなんです。

この世を生きる限りはその阿弥陀さまの願いを繰り返し聞き頂いて生きたことが一番肝要です。ここにいる人みんな、お互いいつかは分らんけど、かならず行かなあかんのや。けど、阿弥陀さまにお任せしたならいつでもいい。生きてよし、死んでよし。どっちにころんでも安心です。今夜寝たが最後、明日の朝は目覚められんかもしれん。でもそう聞いて「どうしよう」と心配して寝られへんのと、「いつでもええ」と安心して眠るのはどっちがいいですか？安心の方がいいと思われるんやつたら、今夜は「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と御礼申しながら寝させてもらいましょ。そして幸いにも明日の朝も目を覚まさせてもらつたら、「尊いみ名をとなえつつ、強く明るく」日を過ごさせていただきますよう。夜分によろこそのお参りでした。なんまんだぶつ、なんまんだぶつ。



八月末、坊守の母が往生しました。葬儀の際は皆様にもお氣遣いを頂き、誠にありがとうございました。▼春先に食欲がないと聞いてから五ヶ月足らず。六十八歳でした。命終に歳や時は関係ないと普段から仏法に聞かせて頂きながら、やはり早すぎるとの念を禁じえせん。▼お寺の行事にはいつも大阪から駆けつけ家事や子守で助けてくれました。普段は離れて暮らしていたので日常に義母の不在を感じることは少なく、一ヶ月経つても未だに実感がありません。でも今度の報恩講にはもう来てくれないと思うと、急に悲しみがこみ上げてきます。▼仏教では悲しみは迷執の姿で厭うべきものです。世間でもネガティブな感情とされ「早く元気になつて」などと励まされます。▼でも故人を思えば自ずと悲しみが溢れます。裏返せば、悲しみを通さなければ私達は懐かしく大切な人と会うことができなのではないでしょうか。▼私達の仏さまはそれを見越して「そのままでもいい」と仰せです。そしてもっと大きな悲しみの心で私を慈しんでください。そのお慈悲の中で安心して悲しみたいと思います。南無阿弥陀仏。(住職)